目　次

1. 総説　器物から読みとく秦漢の歴史と文化　石谷　慎　003
2. 器物図版　015
3. 掲載作品リスト　106
4. 類例報告一覧　108
5. 中国地図（前漢時代）　110

凡　例

・本図録は、黒川古文化研究所における第 122 回展観「秦漢遺宝 ―器物に込めた願い」(2019 年 10 月 12 日～ 11 月 24 日）の開催に伴って編集、発行した。ただし、展覧会の総目録としてではなく、より研究性の高い図録を目指して、掲載作品を絞って部分拡大を増やし、細部の表現を確認しやすいように配慮した。また、作品ごとに類例一覧を掲載し、秦漢時代の古器物研究のインデックスとなるよう意図した。
・収録作品は、秦漢時代の青銅器・銅鏡・貨幣・瓦当に絞り、黒川古文化研究所・泉屋博古館・和泉市久保惣記念美術館・大阪市立美術館の所蔵に限った。
・図版はすべて深井純氏の撮影による。
・本図録の執筆・編集は研究員 石谷慎、デザインは柴千裕が担当した。

総説　器物から読みとく秦漢の歴史と文化

石谷　慎

はじめに

秦漢時代の歴史は『史記』・『漢書』・『後漢書』をはじめとする史書や経書の類によって今に伝わる。その時代の器物やそこに描かれた紋様、記された文字を解釈するうえでも、そうした文献史料に依拠するところは大きい。しかし、当時の人々の思想が後世の人間による操作を経ず、そのまま残されているという点においては、器物以上に優れた資料はないだろう。

だが、秦漢の器物から歴史や文化を読みとくには、前提として、それが間違いなくその時代の資料でなければならない。戦後中国の科学的な発掘調査によって地中から掘り出された資料であれば心配ないが、戦前に日本に将来された伝世資料（もちろん黒川古文化研究所の収蔵品も含む）には、明確な出土地の情報がなく、なかには後世の模倣品や偽作も含まれるからである。

この点において、これまでの古器物研究に手抜かりがあった事実は指摘せざるを得ない。後世につくられた器物を秦漢時代のものとして扱うのは論外だが、中国で続々と発掘成果が上がっているにもかかわらず、古い年代観にしばられ、器物の正確な年代を知ろうとしないのもまた問題である。そして、博物館・美術館が所蔵する伝世器物の資料性を保証するための最も確実な方法が、中国の発掘資料との比較であることは言うまでもない。

幸い、戦後 70 年以上、文化大革命から 40 年以上が経つなかで、中国では膨大な数の発掘調査が行われ、それだけの数の発掘報告が出されている。外国人研究者が直接中国に赴き、発掘調査の内容や出土資料に触れることもずいぶんと容易になった。煩を厭わず、発掘資料を根拠として提示しながら、器物を通して秦漢の歴史とその時代を生きた人々の思想を読み解いていきたい。

１．秦の中国統一と始皇帝

紀元前 221 年、秦は他の六国のなかで最後まで生き残った斉を打倒し、中国を統一する。秦王嬴政は王号を改め、皇帝を称した。世に知られる秦始皇帝の誕生である。『史記』礼書に、「秦の天下を有（たも）つに至り、悉く六国の礼儀を内（い）れ、其の善きを采択する。聖制に合わずと雖も、其の君を尊び臣を抑え、朝廷済々たること、古以来に依る」と言うように、秦は打倒した六国の制度をとり入れ、殷周時代の礼制に従いながらも、因習を払拭する。そして、始皇帝は広大な領土の統治を円滑にするために、様々な統一政策を打ち出していった。

そのなかでも有名なのは、度量衡（長さ・容量・重さ）の統一であろう。『史記』秦始皇本紀には、「法度･衡石･丈尺を一にする。車は軌を同じにし、書は文字を同じにする」とある。また、秦都咸陽で発見された皇帝の詔を記録した詔版には、「廿六年、皇帝盡并兼天下、諸侯黔首大安、立號為皇帝。乃詔丞相状綰、法度量則不壹、歉疑者、皆明壹之」と度量衡の統一事業が宣揚される。黒川古文化研究所の銅詔版の背面には「丞相」「綰」「法」の文字が鋳込まれ【図版８】、中国歴史博物館の旧蔵品には「帝盡」「兼」「諸」と見える（挿図１、史樹青・許青松「秦始皇二十六年詔書及其大字詔版」『文物』1973-12）。大型の詔版を切り分けて小型の詔版につくり直し、各地に頒布したのであろう。『史記』には、度量衡の統一以外に、車軸の統一、文字の統一も行われたと言うが、

1. 蒜頭壺（さんとうこ）

高40.1cm、口径3.3cm、圏足径13.1cm

秦漢時代には、殷周時代の酒器の代表である尊（ゆう）や卣が姿を消したかわりに、様々な形の壺が用いられた。蒜頭壺は戦国時代の秦にはじまり、統一秦に継承され、前漢時代まで続いた。口部の形状が大蒜（にんにく）に似ることからその名がつけられている。湖北省の江陵揚家山 135 号墓に口を木製の栓で塞いだ例、同荊州謝家橋 1 号墓に頸部に縄を結んだ例があり、用途がわかる。中に酒を入れ、栓をして、長い頸の部分を握るか、縄紐で腰にぶら下げるかして運んだのであろう。

出現期の蒜頭壺は口の蒜状部分が大きく膨れるが、しだいにすぼまり、上面が平滑になるとともに、口縁が垂直に立ち上がるようになる。また、器腹が膨れて横に広がり、頸部には突帯がつく。この突帯は縄紐を固定する役割と、手で握りやすくする役割を担ったであろう。底裏に環のつくものもあるが、その機能は明らかでない。

類例	法量	時期	備考	文献
鳳翔高庄 M46：11	通高 34.7cm 口径 3.6cm	秦		雍城考古隊ほか「陝西鳳翔高庄秦墓地発掘簡報」『考古与文物』1981-1
雲夢睡虎地 M9	高 36.7cm 圏足径12.0cm	秦		≪雲夢睡虎地秦墓≫編写組『雲夢睡虎地秦墓』文物出版社、1981 年
雲夢睡虎地 M46：9	通高 40.0cm 圏足径14.6cm	戦国後期		湖北省博物館「1978 年雲夢秦漢墓発掘報告」『考古学報』1986-4
雲夢睡虎地 M47：20	通高 37.5cm 圏足径12.4cm	前漢初	底裏に環	
泌陽 M3：1	高 33.0cm 口径 3.0cm	秦		駐馬店地区文管会ほか「河南泌陽秦墓」『文物』1980-9
泌陽 M3：6	高 40.0cm 口径 4.0cm	秦		
淅川馬川墓地 M33：9	高 30.4cm 口径 3.1cm	前漢前期	底裏に環	河南省文物局南水北調文物保護弁公室ほか「河南淅川県馬川墓地秦人違穴合葬墓」『考古』2016-11
三門峡三里橋 M75：1	高 37.5cm 口径 3.5cm	前漢前中期		三門峡市文物工作隊「三門峡市三里橋秦人墓発掘簡報」『華夏考古』1993-4
江陵揚家山 M135：73	高 38.5cm 口径 4.0cm	戦国後期 〜秦	口に木栓	湖北省荊州地区博物館「江陵揚家山 135 号秦墓発掘簡報」『文物』1993-8
荊州沙子区肖家山 M1：01	高 39.0cm 口径 6.9cm	秦		荊州博物館「湖北荊州市沙子区肖家山一号秦墓」『考古』2005-9
襄陽王坡 M82：8	通高38.2cm 口径 3.6cm	前漢初〜 前期前半		湖北省文物考古研究所ほか『襄陽王坡東周秦漢墓』科学出版社、2005 年
襄陽王坡 M109：9	通高 39.6cm 口径 3.4cm	前漢初〜 前期前半		
荊州謝家橋 M1 東室：12	通高 32cm 口径 3 cm	前漢前期 （B.C.184）	口に木栓、 頸部に縄	荊州博物館「湖北荊州謝家橋一号漢墓発掘簡報」『文物』2009-4
丹江口蓮花池 M7：8	高 39.6cm 圏足径13.6cm	前漢中期 後半		北京市文物研究所ほか「湖北丹江口市蓮花池墓地戦国秦漢墓」『考古』2011-4
宜昌前坪 M97：7	高 29.0cm	前漢後期	底裏に環	宜昌地区博物館「1978 年宜昌前坪漢墓発掘簡報」『考古』1985-5

7. 雷紋地蟠螭紋鏡（らいもんじ ばんちもんきょう）

直径17.1cm

蟠螭紋鏡は、戦国時代の終わり頃に秦の領内でつくられた細地紋鏡群と、楚の領内でつくられた雷地紋鏡群が融合した鏡であり、初期には長沙や淮南など長江流域の旧楚領で製作された。秦代から前漢初めの蟠螭紋鏡は、銘帯をもたず、紋様帯に３体ないし４体の螭をめぐらすだけの例がほとんどである。蟠螭という語は宋の『博古図』にすでに登場しており、『説文解字』に「螭　龍の若くして黄。北方に之を地螻（みずち）と謂う。･･･或いは云く、角無きを螭と曰う、と」と言うように、本来は青銅器上で絡みあう角のない龍を指したと思われるが、蟠螭紋鏡に描かれる龍は角も足もつくのが一般的である。

龍と雷紋（渦紋）は殷周青銅器以来の組合せである。もとは龍の羽根を表現した部分が、分解されて雲気紋や渦紋としてあらわされるようになった。『管子』形勢解に、「蛟龍は水蟲の神なる者」で、「水に乗じれば神（の効）が立つが、水を失えば神も廃る」と言われる。本質を失った渦紋は、龍の背景としてあらわされることで、龍が水中に棲息するという観念と結びついた。

類 例	法 量	時 期	備 考	文 献
長沙火車新站郵局工地 M4	直径19.5cm 重　463 g	戦国		長沙市博物館『楚風漢韻 長沙市博物館蔵鏡』文物出版社、2010 年
長沙五里牌郵 M4（M1196）：15	直径19.7cm 縁厚　0.6cm	戦国後期	鈕座内にも三龍	湖南省博物館ほか『長沙楚墓』（上下）文物出版社、2000 年

17. 鍍金雲気紋酒樽（ときんうんきもんしゅそん） 通高21.4cm、口径18.3cm

18. 鍍金雲気紋酒樽 通高19.6cm、口径18.1cm

円筒形の胴に鋪首と三足がつき、円錐形の蓋をともなう器を酒樽と言う。同形の漆器や陶器は「奩（れん）」と呼ばれることが多い。奩は櫛や鏡などを納める化粧箱であるが、銅製の酒樽は後漢の画像石に描かれるように宴席に据えられたため、鍍金や彩色が施されて華やかである。泉屋博古館例のように蓋の中央に環、外側に鳥獣類を象る3個の蓋脚をつけ、ひっくり返して置けるようになっているのが本来の姿であるが、新代以降には蓋の中央にも飾りをつける例が現れる。ただし、黒川例の蓋中央の飾りは後補である。

鍍金（滅金（めっき））は、金と水銀を混ぜたアマルガムを銅の表面に塗布し、加熱して水銀だけを蒸発させ、金を銅の表面に定着させる技法である。金は錆びないため、器を飾るだけでなく防蝕の効果もある。中国では戦国時代に現れ、漢代には王侯貴族の調度品や宴席用の器に多用された。

類例	法量	時期	備考	文献
邗江姚荘	高 20.2cm 口径 19.6cm	前漢後期		中国青銅器全集編輯委員会『中国青銅器全集』第12巻（秦漢）、文物出版社、1998年
長沙 M211：10	通高 18.5cm 口径 17.8cm	前漢後期		中国科学院考古研究所『長沙発掘報告』科学出版社、1957年
東海尹湾 M6：35	通高 17.8cm 径 18.2cm	元延三年（B.C.10）		連雲港市博物館「江蘇東海県尹湾漢墓群発掘簡報」『文物』1996-8
長安芙蓉南路 M1	通高 13.6cm 口径 14.5cm	新		西安市文物保護考古所ほか『長安漢墓』（上下）、陝西人民出版社、2004年
邗江楊寿郷宝女墩 K1：3	通高 25cm 口径 23.6cm	新	頂部にも鳥形鈕	揚州博物館ほか「江蘇邗江県楊寿郷宝女墩新莽墓」『文物』1991-10

33. 星雲紋鏡（せいうんもんきょう）

直径15.9cm

高くそびえる仙山と、天に輝く無数の星、その周囲をめぐる雲気をあらわす象徴的な鏡である。『博古図』では「百乳鑑」と名付けられている。蟠螭紋鏡の龍の表現と草葉紋鏡の連弧縁や乳の表現をあわせもつ螭龍紋鏡という鏡がその原型である。仙山を象る連峰鈕が渦を巻くようにあらわされるのが本来で、本鏡のように中心と周囲の八峰が分離するのは定型化した表現であるが、本鏡においても乳の一つひとつは渦巻いている。また、乳座は円形から四葉座に変わる。これは草葉紋鏡や重圏銘帯鏡の鈕座にも通じる時代様式である。

類例	法量	時期	備考	文献
日照海曲 M106：24-15	直径15.9cm 縁厚 0.6cm	前漢中期	漆奩内	山東省文物考古研究所「山東日照海曲西漢墓（M106）発掘簡報」『文物』2010-1
盱眙東陽 M01：1	直径15.9cm	前漢中期 ～後期		南京博物院「江蘇盱眙東陽漢墓」『考古』1979-5
長沙 M405：2	直径13.4cm 縁厚0.65cm	前漢後期		中国科学院考古研究所『長沙発掘報告』科学出版社、1957 年
連雲港霍賀墓	直径約13cm	前漢後期	径は拓本より復原	南京博物院ほか「海州西漢霍賀墓清理簡報」『考古』1974-3

3. 掲載作品リスト

※種別略称　青銅器：B　銅鏡：M　貨幣：C　瓦塼：T　玉器：J

図版	番号	種別	名称	法量	時代	所蔵（収蔵番号）
1．秦の中国統一と始皇帝						
1	1	B	蒜頭壺	高 40.1cm、口径 3.3cm、圏足径 13.1cm	秦～前漢初	大阪市立美術館（OM8267）
2	2	B	「衛」鼎	通高 15.6cm、口径 13.2cm	前漢前期	黒川古文化研究所（銅 53）
3	3	M	重圏紋鏡	直径 16.3cm	戦国末～秦	泉屋博古館（M175）
4	4	M	細紋地四鳳紋鏡	直径 10.6cm	戦国末～秦	黒川古文化研究所（鏡 18）
5	5	M	細紋地連弧縁三螭紋鏡	直径 11.0cm	戦国末～前漢初	泉屋博古館（M177）
6	6	M	細紋地連弧縁三螭紋鏡	直径 16.5cm	秦～前漢初	大阪市立美術館（OM27）
7	7	M	雷紋地蟠螭紋鏡	直径 17.1cm	秦～前漢初	大阪市立美術館（OM3666）
8	8	B	「廿六年」詔版	高 9.0cm、幅 7.4cm	秦	黒川古文化研究所（考 523）
9	9	C	「安邑二釿」橋足布	高 6.5cm、幅 4.0cm、重 25.7 g	戦国中期（魏）	黒川古文化研究所（C.C.367）
	10	C	「梁正尚百当寺」橋足布	高 5.9cm、幅 4.2cm、重 12.2 g	戦国後期（魏）	黒川古文化研究所（C.C.390）
	11	C	「平陰」方足布	高 4.7cm、幅 2.8cm、重 5.4 g	戦国後期（趙）	黒川古文化研究所（C.C.283）
	12	C	「殊布当圻」方足布	高 10.4cm、幅 3.7cm、重 36.7 g	戦国後期（楚）	黒川古文化研究所（C.C.223）
	13	C	「明」平斜首刀	長 13.6cm、幅 1.5cm、重 17.4 g	戦国後期（燕）	黒川古文化研究所（C.C.20）
	14	C	斉大刀	長 18.5cm、幅 3.0cm、重 45.4 g	戦国後期（斉）	黒川古文化研究所（C.C.149）
10	15	C	「隰六刀」円銭	直径 3.7cm、重 10.1 g	戦国後期（斉）	黒川古文化研究所（C.C.430）
	16	C	半両銭	直径 3.3cm、重 6.4 g	戦国末～秦	黒川古文化研究所（C.C.457）
	17	C	両甾銭	直径 3.3cm、重 6.8 g	秦	黒川古文化研究所（C.C.442）
	18	C	半両銭	直径 2.7cm、重 4.3 g	秦	黒川古文化研究所（C.C.454）
	19	C	半両銭	直径 2.4cm、重 3.1 g	秦～前漢前期	黒川古文化研究所（C.C.2798）
11	20	T	雲紋半瓦当	高 7.4cm、現幅 14.9cm	秦	久保惣記念美術館
12	21	T	渦雲紋瓦当	直径 15.2cm	秦	黒川古文化研究所（瓦 1078）
2．漢王朝の至宝 ―器を飾る神と獣―						
13	22	B	銅錯紋壺	高 30.0cm、口径 11.0cm	秦～前漢初	泉屋博古館（彝 255）
14	23	B	獣環鍾	高 42.4cm、口径 17.4cm	前漢中期	黒川古文化研究所（銅 74）
15	24	B	提梁壺	通高 43.0cm、口径 12.7cm	前漢後期～新	泉屋博古館（彝 235）
16	25	B	提梁付鐎尊	通高 17.5cm、口径 7.2cm	前漢後期	黒川古文化研究所（銅 57）
17	26	B	鍍金雲気紋酒樽	通高 21.4cm、口径 18.3cm	前漢後期～新	黒川古文化研究所（銅 68）
18	27	B	鍍金雲気紋酒樽	通高 19.6cm、口径 18.1cm	前漢後期～新	泉屋博古館（彝 132）
19	28	B	鍍金鋗	高 8.0cm、口径 21.8cm	前漢後期	泉屋博古館（彝 114）
20	29	B	羽紋盦	通高 22.2cm、口径 26.0cm	前漢末～新	泉屋博古館（彝 115）
21	30	J	渦紋玉璧	直径 13.8cm	前漢前期～中期	黒川古文化研究所（殷 116）
22	31	J	饕餮渦紋玉璧	直径 17.1cm	前漢前期～中期	黒川古文化研究所（殷 1022）
23	32	C	陶五銖銭模	現長 7.5 × 4.5cm、厚 2.5cm	前漢中期	黒川古文化研究所（貨 10-5）
24	33	C	銅五銖銭笵	現長 18.0 × 7.7cm、厚 1.0cm	前漢中期	黒川古文化研究所（貨 11-14）
25	34	C	楡莢半両銭	直径 1.6cm、重 0.7 g	前漢前期	黒川古文化研究所（C.C.460）
	35	C	三銖銭	直径 2.4cm、重 2.2 g	前漢中期	黒川古文化研究所（C.C.525）
	36	C	半両銭	直径 2.6cm、重 2.7 g	前漢中期	黒川古文化研究所（C.C.534）
	37	C	五銖銭	直径 2.7cm、重 4.3 g	前漢中期	黒川古文化研究所（C.C.541）
	38	C	五銖銭	直径 2.6cm、重 4.2 g	前漢中期	黒川古文化研究所（C.C.649）
3．「千秋萬歳」―武帝も憧れた神仙世界―						
26	39	T	蕨手状雲紋瓦当	直径 15.0cm	前漢	黒川古文化研究所（瓦 1027）
27	40	T	「長楽未央」瓦当	直径 17.0cm	前漢	黒川古文化研究所（瓦 1046）
28	41	T	「長生無極」瓦当	直径 17.3cm	前漢	黒川古文化研究所（瓦 1042）
29	42	T	「千秋萬歳」瓦当	直径 19.0cm	前漢	黒川古文化研究所（瓦 1036）
30	43	T	鳳紋瓦当	直径 14.4cm	秦～前漢	黒川古文化研究所（瓦 1022）
31	44	M	雷紋地蟠螭草葉紋鏡	直径 17.0cm	前漢中期	黒川古文化研究所（鏡 23）
32	45	M	雷紋地蟠螭草葉紋鏡	直径 13.9cm	前漢中期	泉屋博古館（M205）
33	46	M	星雲紋鏡	直径 15.9cm	前漢中期～後期	黒川古文化研究所（鏡 27）
34	47	M	異体字銘帯鏡	直径 9.4cm	前漢中期～後期	泉屋博古館（M6）
35	48	M	異体字銘帯鏡	直径 9.7cm	前漢後期	黒川古文化研究所（鏡 31）
36	49	B	朱雀玄武博山炉	通高 22.2cm、盤径 18.9cm	前漢後期～新	久保惣記念美術館
37	50	T	「千秋万歳」空芯塼	高 32.8cm、幅 32.8cm、厚 5.0cm	前漢後期	黒川古文化研究所（瓦 2010）
4．文明の行方 ―銅器生産の私営化と商品化―						
38	51	M	「尚方作」方格規矩四神紋鏡	直径 21.0cm	前漢末～新	泉屋博古館（M209）
39	52	M	「王氏作」方格規矩八鳥紋鏡	直径 13.7cm	後漢前期	泉屋博古館（M105）
40	53	T	朱雀紋瓦当	直径 16.0cm	新代	黒川古文化研究所（瓦 1023）
41	54	T	白虎紋瓦当	直径 18.0cm	新代	黒川古文化研究所（瓦 1020）
42	55	T	「千秋萬歳」瓦当	直径 15.1cm	前漢～新	久保惣記念美術館
43	56	T	「八風壽存當」瓦当	直径 15.3cm	前漢～新	久保惣記念美術館
44	57	T	「千秋萬歳」雲紋瓦当	直径 14.1cm	後漢時代	久保惣記念美術館
45	58	T	連子雲紋瓦当	直径 15.1cm	前漢後期	久保惣記念美術館
46	59	T	蘑菇状雲紋瓦当	直径 18.9cm	後漢時代	久保惣記念美術館
47	60	B	「堂狼朱槎」洗	高 17.3cm、口径 38.5cm	後漢時代（107）	黒川古文化研究所（銅 62）
48	61	C	「大泉五十」銭	直径 2.8cm、重 8.8 g	前漢末：居摂二年（７）	黒川古文化研究所（C.C.2809）
	62	C	「大泉五十」銭（鋳放し）	3.5 × 3.4cm、重 10.6 g	前漢末：居摂二年（７）	黒川古文化研究所（C.C.853）
	63	C	「小泉直一」銭	直径 1.6cm、重 1.6 g	新：始建国元年（9）	黒川古文化研究所（C.C.571）
	64	C	貨泉	直径 2.3cm、重 2.9 g	新：地皇元年（20）	黒川古文化研究所（C.C.2803）
	65	C	貨布	長 5.8cm、重 16.9 g	新：地皇元年（20）	黒川古文化研究所（C.C.630）
	66	C	五銖銭	直径 2.6cm、重 2.7 g	後漢時代	黒川古文化研究所（C.C.2821）
	67	C	剪輪五銖銭	直径 1.8cm、重 0.9 g	後漢時代	黒川古文化研究所（C.C.2823）
	68	C	五銖銭（背面四出）	直径 2.5cm、重 3.0 g	後漢：中平三年（186）	黒川古文化研究所（C.C.665）

秦漢遺宝―器物に込めた願い